

都市観光回遊行動パターンの基礎分析：大阪キタ・ミナミ地区の比較

Basic analysis of Osaka city sightseeing excursion patterns:

A comparative case study on Kita and Minami districts

李知雄*・西井和夫**・近藤勝直***・佐々木邦明**

By Jiwoong Lee*, Kazuo Nishii**, Katsunao Kondo*** and Kuniaki Sasaki**

1. 研究の目的

本研究では、都市観光の代表的な地区の一つである大阪都心部の2地区（キタ・ミナミ）を取り上げ、当地区を来訪する観光客の回遊行動の実態把握を行うとともに、調査対象地区間の比較分析を通じて都市観光における回遊行動パターンに関する基本特性を明らかにすることを目的とする。また本分析結果を踏まえて、今後の都市観光の活性化策の検討のあり方ならびに都市観光回遊行動パターンの変化を予測できるモデル構築に向けた課題整理を行う。

2. 研究方法

(1) 調査の概要（表-1参照）

調査対象地区は、JR大阪駅と私鉄・地下鉄梅田駅を中心とした約500m四方をキタ地区とし、一方ミナミ地区は大阪市浪速区から大阪市中央区にかけて位置し地下鉄御堂筋線心斎橋駅および難波駅を中心とした半径500m四方の地域を定義した。調査実施方法は、調査員による手渡し・郵送回収により行われ約2000票の調査票が配布された。その結果、回収率は、表-1に示すように8.4%で同種の街頭での手渡し配布・郵送回収の場合とほぼ同じであった（第4回京阪神PT調査知中間年次補完調査（都市回遊プレ調査）8%程度）。この回収率のレベルを考慮すると、調査対象者と調査地点の設定の妥当性評価について、手渡し配布のため調査への協力性や関心度の高い層に偏る危険性があること、また調査地点も、流入駅分布や来訪スポット分布に関する結果に影響する場合もあることなど課題点を残している。

表-1 調査概要

調査実施方法	地区来訪観光客への手渡し配布 ・郵送回収方式
対象地区	大阪キタ・ミナミの2地区
調査対象者	各地区ともに観光スポット周辺の5箇所
調査実施日	2005年10月30日11時～16時
配布・回収 状況	キタ：配布約900枚 回収74枚 回収率8.2 ミナミ：配布1259枚 回収108枚 回収率8.6 合計：配布2159枚 回収182枚 回収率8.4

(2) サンプルの基本属性

キタの方は女性比率が（65%）やや高いのに対してミナミの方は若年層（20代23%）が高かった。これは調査地点/配布対象者/回答可能性によるバイアスが存在したと考えられる。したがって、これを拡大して用いることには問題があり、以降の分析では回遊行動パターンの特性把握を中心としたサンプルベースの検討を行うことにする。また、キタは兵庫県からの来訪割合（28%）が高いし、ミナミは兵庫県/京都府/奈良県からのほぼ均一な来訪割合（7-9%）を示している。しかし、両地区とも大阪市内/府内で半数以上を占めるから近隣府県からの来訪が主であると考えられる。旅行行程は、前述の個人属性と同様に、調査実施方法（調査地点/対象者）によるサンプルの偏りの検証が必要であるが、日帰り型で同行者ありの旅行形態が主要パターンであると推測される。

(3) 地区来訪の事前予定/地区情報入手の有無

図1より、地区を来訪する際に情報入手なしの割合はキタが50%と高い（ミナミ：33%）。また、何らかの情報入手の場合、そのメディアは多様であり、キタ：1位 その他、2位インターネット、3位人から、4位タウン雑誌、ミナミ：1位人から、2位インターネット、3位 その他、4位タウン雑誌である。これより、事前に地区情報入手は多様であるが、旅行会社からの情報入手あるいは到着後の電子情報からの入手は少ないといえる。

図2より、両地区への来訪頻度は高くしてリピーターの割合はキタの方がやや多い。また、地区へのアクセス

Keyword: 回遊特性、回遊行動、立寄りストップ数

*入会手続き中 山梨大学工学部土木環境工学科

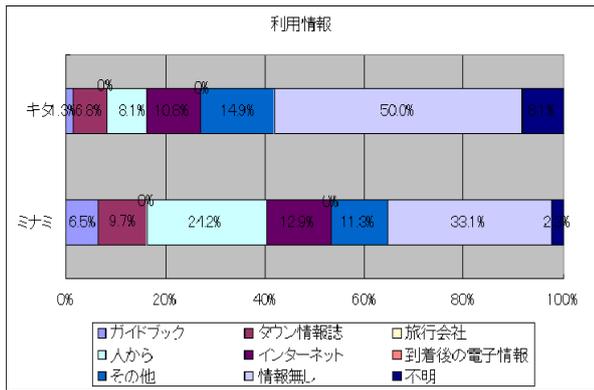
**正会員 工博 山梨大学大学院医学工学総合研究部教授

***正会員 工博 流通科学大学情報部経済情報科教授

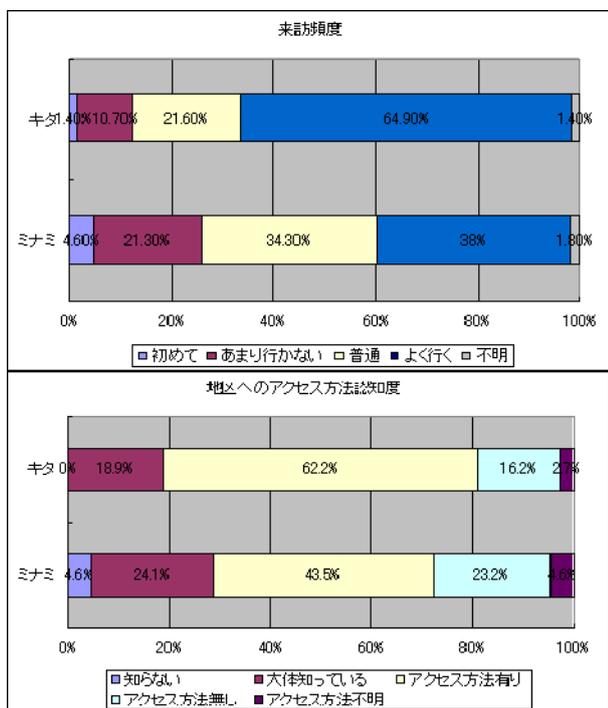
〒400-8511

山梨県 甲府市武田4-3-11 (Tel:055-220-8533)

方法の認知度も両地区とも高いことを示している。



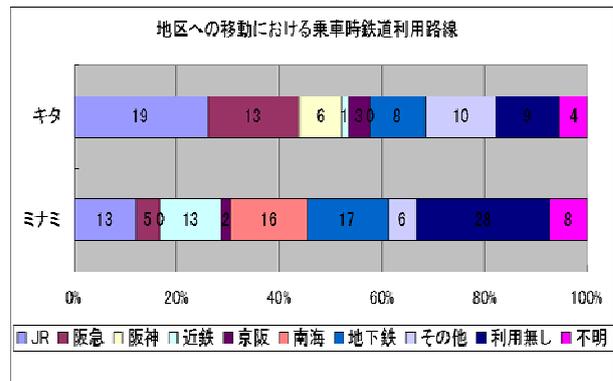
図一 1 地区情報の入手の有無と手段



図二 2 来訪頻度とアクセス方法認知度

(4) 当日の地区来訪前後の回遊

地区へのアクセス手段（初乗り側利用鉄道路線）の構成割合は、図3よりキタ：1位JR26%、2位阪急18%、3位その他14%、4位地下鉄11%、5位阪神8%、鉄道利用なし：12%、ミナミ：1位地下鉄16%、2位南海：15%、3位近鉄12%、4位JR12%、5位その他6%、鉄道利用なし：26%を示している。これらの利用割合は調査地点の影響を受けているので、実際の地区内の鉄道利用構成割合と必ずしも一致していないことに注意が必要である。また、利用路線による回遊行動パターンの差異が有意でなければ、このサンプルから類型化される回遊行動パターンが利用路線をとわない全体の傾向をほぼ代表しているものとみなすことができる。



図三 地区来訪利用手段（初乗り）

表2は、地区来訪前の出発地構成を示す。これより両地区の立寄り先からの来訪率はキタ11%、ミナミ13%で立寄りの有無はキタ：12%、ミナミ：21%を示している。具体的立寄り場所としてキタ：大阪市内63%、京都府25%、ミナミ：大阪市内50%、大阪府内29%を示している。立寄り先の分布はキタの場合：大阪市内：それ以外＝2：1、ミナミの場合：大阪市内：それ以外＝1：1であり、地区来訪前の立寄りパターンを分類すると表3のようになる。これらの4タイプ以外が直行型でキタ88%、ミナミ79%を示しており、この約10%の差異は自宅と地区との間の立寄り先の有無等が影響していると考えられる。

表一 2 地区に来る前の出発地・立寄り先

アクセス側特性		キタ	ミナミ
地区への移動の出発地	自宅	65人 (87.8%)	85人 (78.7%)
	立寄り先	8人 (10.8%)	14人 (13.0%)
	不明	1人 (1.4%)	9人 (8.3%)
地区前の立寄り先	大阪市内	5人 (62.5%)	7人 (50.0%)
	大阪府内	0人 (0%)	4人 (28.6%)
	京都府	2人 (25.0%)	2人 (14.3%)
	兵庫県	1人 (12.5%)	0人 (0%)
	以外	0人 (0%)	1人 (7.1%)

表三 地区来訪前の立寄りパターンの分類

(注：自宅の現在所を市内：市外＝1：3と仮定)

Type 1	H(市内)→S(市内)→地区(市内回遊型)
Type 2	H(市内)→S(市外)→地区(市外お出かけ型)
Type 3	H(市外)→S(市内)→地区(市内お出かけ型)
Type 4	H(市外)→S(市外)→地区(広域回遊型)

表4は、地区来訪後の移動先等の構成を示す。これより、直行帰宅型（直帰型）はキタ76%、ミナミ73%で、宿泊先への移動も含めると、両地区とも約8割直帰型である。一方、地区からの立回り型は全体の約2割で、地区来訪前の立寄りと同じ傾向（市内：市外=2:1（キタ）、1:1（ミナミ））である。しかし、市外のどの地域かはキタが兵庫県の市内に次いで多いのに対して、ミナミは大阪府内が多いことが特徴的である。

表-4 地区からのイグレス

イグレス側特性		キタ	ミナミ
地区からの移動先	自宅	56人(75.7%)	79人(73.1%)
	宿泊先	2人(2.7%)	4人(5.4%)
	立寄り先	13人(17.6%)	13人(12.0%)
	不明	3人(4.0%)	12人(9.5%)
地区後の立寄り先	大阪市内	10人(66.7%)	8人(47.1%)
	大阪府内	1人(6.7%)	6人(35.2%)
	兵庫県	3人(19.9%)	1人(5.9%)
	奈良県	0人(0.0%)	1人(5.9%)
	その他	1人(6.7%)	1人(5.9%)

(5) 当日の地区活動

図4に示すように、地区内平均ストップ数は、キタ：2.86ストップ、ミナミ：2.84ストップである。これは2004年実施の第4回京阪神PT補完調査（回遊行動プレ調査）結果と比較すると神戸南京町2.40ストップと同レベルであること、また一日全体のストップ数分布（観光スポット数）からの平均ストップ数比較においても、妥当な結果を得ていると判断できる。

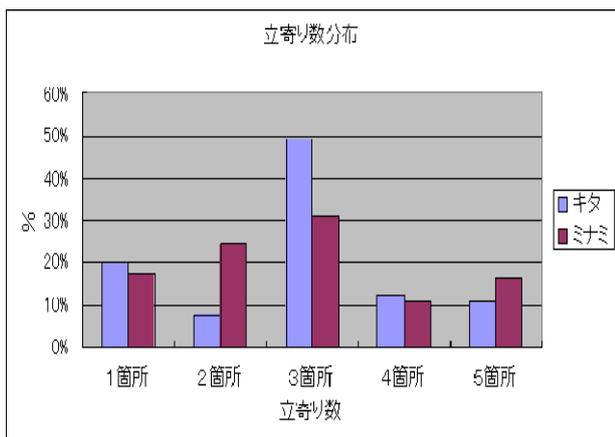


図-4 地区内立寄りストップ数分布

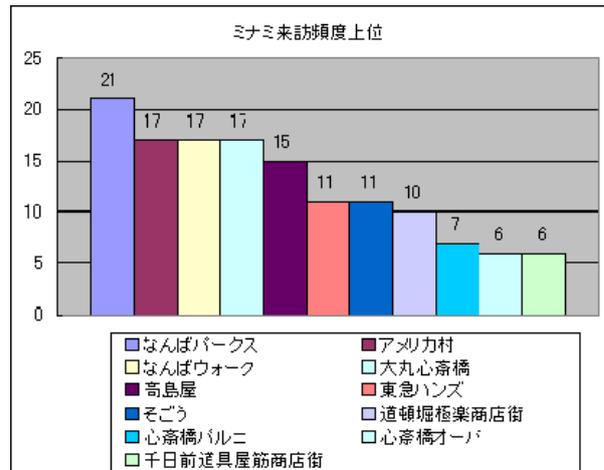
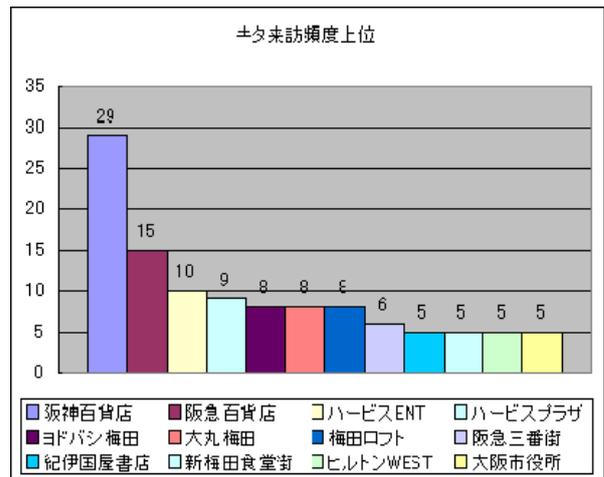


図-5 地区内来訪施設分布
(ただし、個人の立寄施設の重複集計である)

図5は、地区内来訪施設分布の上位施設を示す。これより、キタの阪神百貨店は、延べ来訪施設総数に占める割合が16%と突出（全体の74人中、29人が来訪している）、4割近い割合）している。これにより、来訪施設連関を求めれば、キタは、梅田のターミナル施設を中心とした比較的狭い範囲の回遊パターンで形成されているといえる。また、キタの上位12位までの来訪施設数は全体の54%を占めるが、このほとんどは梅田のターミナル施設である。

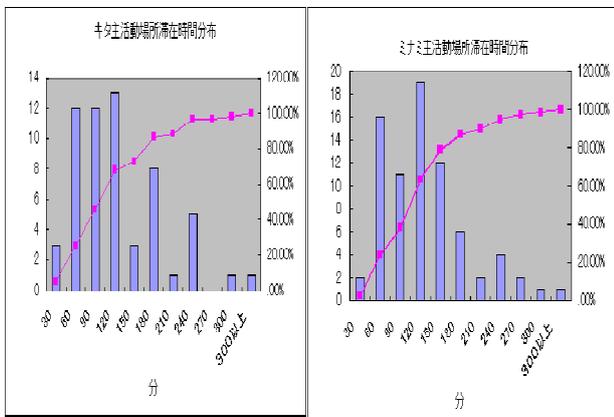
一方、ミナミの場合は、なんばパークス、アメリカ村、なんばウォーク、大丸心齋橋、高島屋、東急ハンズ、そごう、道頓堀極楽商店街など広く分布しているのが特徴である。また、来訪施設の施設形態（客層）も多様でキタの来訪施設の空間分布と異なるパターンといえる。

表5に示した典型的な地区内活動パターンに着目すると、大型ショッピング施設での「買物」、その周辺に立地する飲食サービス施設での「飲食」、そして地区内のウインドショッピングなどの「まちぶら」の3点セットといえる。

表—5 地区内での主な活動内容

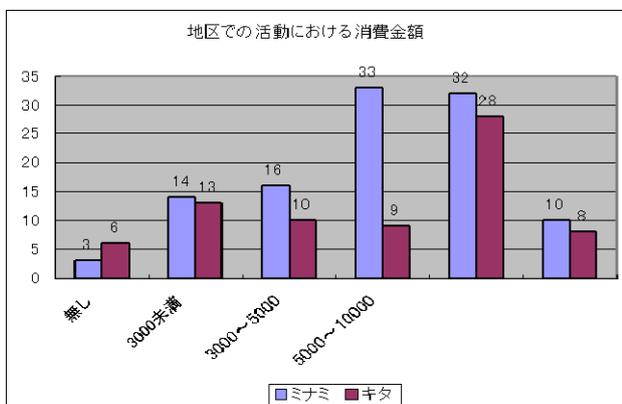
	キタ	ミナミ
1位	買物51%	買物42%
2位	飲食26%	飲食20%
3位	散策8%	散策17%
4位	その他5%	芸能娯楽5%
5位	芸能娯楽4%	その他4%
5位までの累積	94%	88%

図6は、地区内での主な活動場所での滞在時間分布を示す。これより、滞在時間分布は両地区で全体的に似ており、平均滞在時間（キタ105分、ミナミ120分）はキタがやや短いといえる。



図—6 地区内主活動の滞在時間分布

都市観光回遊行動は、一般の自然景勝地型観光に比べて観光活動が多様であり、特に食事や買物などの消費/購買行動を伴うため、平均消費額は比較的に高いといえる。図7に示した平均消費額をみると、両地区ともに5000-10000円の間であるが、キタがミナミに比べてやや分布がひろがっており、消費/購買の多様性を読み取ることができる。

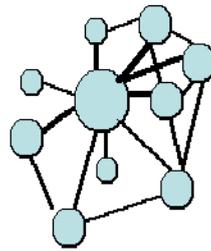


図—7 都市観光回遊における消費金額分布

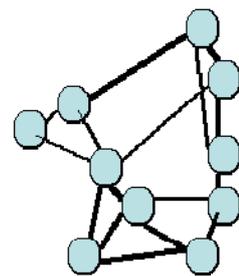
3. まとめと今後の課題

これまでの基礎分析結果に基づき両地区の都市観光回遊行動パターンの特徴点を集約すれば、キタが梅田ターミナルを中心とした比較的狭い回遊行動パターン、ミナミは立ち寄り施設が広く分布してキタに比べ来訪施設の施設形態も多用であるといえる。よってこのことから次のような施設関連イメージが考えられる。

キタの施設関連イメージ:



ミナミの施設関連イメージ:



以上の基礎集計分析では大阪都市部の各地区（キタ・ミナミ）を取り上げ、来訪する観光客の回遊行動の実態把握及び調査対象地区間の比較分析を行った。次の課題としては、これらの回遊行動特性をもとに都市観光回遊行動パターンの変化を予測できるモデルを提案することである。そのため今後は回遊行動モデル構築に関する規定要因（ex: 地区前後の立寄りパターン、地区内主活動の滞在時間など）の抽出と具体的な同定化を行う予定であり、その結果については講演時に発表する。

参考文献

- 1) 第4回京阪神都市圏PT調査中間年次調査研究会：平成17年度京阪神都市圏総合都市交通調査PT補完関連調査実施方針資料
- 2) 西井和夫(2006)；都市観光と都市型観光地交通，第4回都市観光研究委員会（流通科学大学近藤直主査）資料
- 3) 山根広嗣(2004)；周遊行動パターンに着目した観光客情報利用ニーズに関する分析，第31回土木計画学研究発表会講演集，CD-ROM